令和３年度　綾部市総合教育会議　議事録

１　日　時　　令和４年３月２日（金）
　　開会　１５時　　閉会　１６時３０分

２　会　場　　綾部市役所　まちづくりセンター第１会議室

３　出席者　　綾部市長　　山崎　善也
　　綾部市教育委員会
　　教育長　　村上　元良
　　委　員　　小南　直美
　　委　員　　波多野　芳雄
　　委　員　　樋口　高夫
　　委　員　　大島　友紀子
　　（事務局関係）

市長公室長	岩本　正信
企画総務部長	吉田　清人
保健福祉部長	大石　浩明
教育部長	大槻　伸一
学校教育課長	斉藤　さおり
社会教育課長	立藤　江理
学校教育課長補佐(指導主事)	矢谷　裕美
学校教育課長補佐(指導主事)	青木　賢次
学校教育課学務指導担当長	松下　　修
学校教育課管理担当長	荻野　涼子
学校教育課総括指導主事	井上　隆史
学校教育課指導主事	長野　代理子
学校教育課指導主事	高橋　直美
教育支援センター指導主事	竹林　敦史

４　協議事項　　綾部市の教育における現状と課題
　　・複式学級の現状と課題
　　・学校におけるいじめの現状と今後の取組
　　・不登校の状況と綾部市教育支援センターの活動
　　綾部市の教育構想について

５　議事の大要

○　開　会

○　綾部市長挨拶

○　協議事項

綾部市の教育における現状と課題

綾部市の教育構想について

○　協議事項

＜議長：綾部市長＞

本日の協議事項は「綾部市の教育における現状と課題」です。

最初に「複式学級の現状と課題」について、事務局から説明をお願いします。

（学校教育課　矢谷指導主事）

＜議長：綾部市長＞

続いて、「学校におけるいじめの現状と今後の取組」について、説明をお願いします。

（学校教育課　青木指導主事）

＜議長：綾部市長＞

続いて、「不登校の状況と綾部市教育支援センターの活動」について、説明をお願いします。

（学校教育課　高橋指導主事）

（学校教育課　竹林指導主事）

＜議長：綾部市長＞

最後に、「綾部市の教育構想」について、説明をお願いします。

（学校教育課　井上総括指導主事）

＜議長：綾部市長＞

ただ今の報告や説明を受け、皆様からご質問やご感想、教育委員の皆様方のお考えや意見をいただきたいと思いますので、よろしくお願いします。

＜小南委員＞

竹林先生のやすらぎルームの話を聞いて大変感動していたのですが、まず、相談件数が５０５件あったということで、これは、やすらぎルームの先生方と学校の先生や保護

者の信頼関係がとてもよく築けているから、これだけ相談が集まると思うのですが、その手法を学校の先生方に教えていただけたら、先生と不登校の親御さんとの関係を築くきっかけになるのではないかと思いました。

また、通われている子どもの数が増えていると聞きましたが、増えたことで困っていることはありますか。

＜事務局＞

課題ですが、個別相談できる個室があればと思います。子どもが大勢来ているので、事前に相談の連絡があれば午後に時間を設定しますが、午前中に飛び入りで相談に来られた時は場所がありません。また、駐車場が４・５台分しかなく、送り迎えが多くなってきているので、できればもう少し広ければ助かります。

また、指導員の増員ができればと思っています。通ってくる子が増えていく中で、小学校の低学年の子や情緒面や特性の面で寄り添いが必要な子は、特に個々に関わってあげたいと思いますが、時間的に十分にでき切れていなという気持ちがあります。子どもたち同士の関わりもすごく大きな役割があり、指導員がずっと関わらなくてもよいというのはわかっていますが、できるだけ指導員も関われる形が必要だと感じています。

余談になりますが、指導員と子どもたちの会話の中で、指導員が中学生に「ここで学習やいろんな活動をしているけれど、もっとこんな事をしたい、何かした方がよい事があれば言ってほしい。」と聞いたとき、「先生、ここがあることがいいのではないですか。」と言った言葉が心に残っています。

＜小南委員＞

ありがとうございました。ぜひ、やすらぎルームのノウハウを、全校に広げていただきたいと思います。

＜波多野委員＞

不登校の発生状況の対応について、早期発見、早期対応が大事だと言われましたが、指導員の数などが課題にはなってきますが、不登校になるかもしれないなと子どもがみられたときに、その保護者とやすらぎルームの先生が面談できるようなルートができればよいのではないでしょうか。このまま放っておいたら不登校になるかもしれないという見通しがあるときに、保護者へ話をしていく、保護者も状況を認識していく、こうして育てていくのだということが共有できる、そういうシステム的なことができればと思います。

＜事務局＞

貴重な意見ありがとうございます。

不登校になりそうな子について、早期発見、早期対応は非常に重要であると認識しています。各学校では、心配だなという子についてはケース会議を開いています。その中で、その子に対するアセスメントをします。その場に、やすらぎルームの専門のスクールカウンセラーや学び生活アドバイザーなどにケース会議に入っていただいていますので、「この子はやすらぎルームと保護者をつないだ方がよい」という意見がでれば、そういう形をとることも可能であると思います。今後、そういう道筋をつけていくこ

とも大切だと思います。

＜樋口委員＞

綾部市の教育構想、特に幼児教育の構想ついて、綾部市の就学前教育は、幼稚園は八田幼稚園のみとなり、大部分の子どもがこども園や幼児園、保育園から小学校へ行くようになりましたが、その中で、綾部市の子どもをどのように育んでいくかを考えていかなければならないという状況だと思います。各園ではこんな子どもに育てたいという保育目標を持ち、実践いただいていますが、設置者が様々なので、「綾部の子どもをどんな風に育てていきたいのか」という視点での、目標やよりどころになる「育てたい子ども像」をイメージして取り組むといのはなかなか難しいのではないかと思います。

教育委員会でも、幼稚園については構想を示して一緒にやっていこうという流れはできていると思いますが、他の施設についてはなかなか難しいのではないでしょうか。教育委員会と福祉保健部が連携して、綾部市の幼児教育の構想を作っていく必要があると思います。どんな風にして子どもを育てていくのか、綾部市全体の幼児教育をどうするか、という観点での園での取り組みをどうしていったらよいのか、教育委員会の課題でもあるし、保健福祉部の課題でもあり、綾部市の課題でもあると思います。

＜議長：綾部市長＞

綾部市では未就学児はほとんどが保育園、幼児園へ行っており、そこでかなりの人格形成がなされる大事な時期ではあると思いますが、それを今後の教育構想にどのように落とし込んでいくか、メッセージをだしていくかは重要な指摘であると思います。

現在、教育委員会で考えていることはありますか。

＜事務局＞

幼稚園に通う子どもは１０名前後、そのほかの２００名程度の子どもは他の保育園、こども園、幼児園から入学してくる状況であり、教育委員会でも、就学前の保育や教育について、綾部市全体で同じ小学校に入学してくる子どもとして、しっかり認識し、連携をとっていかなければならないということは大きな課題としてとらえています。

現在、こども支援課と連携して進めていることは、接続期カリキュラムの作成とその充実です。「接続期カリキュラム」は、５歳児の２学期以降のスケジュールを小学校への就学を見据えて取り組んでいくという「アプローチカリキュラム」を各園が作成するというカリキュラムです。この「アプローチカリキュラム」は、幼稚園と幼児園はすでに作成しており、小学校へつないでいますが、その他の保育園、こども園は昨年度までは作成できていませんでした。今年度はその他の園についても、保幼小をつないでいくという意識をもってカリキュラムを作成いただき、作成したものについては、今年度末に園から学校へ引き継いでいく予定にしています。それを受けて、１年生でのカリキュラムは「スタートカリキュラム」というものになりますが、子どもたちがどのように育ってきたかという視点を大事にしてカリキュラムを作成し、スタート時期である４月５月を丁寧に見とっていく、その接続を大事に考えた教育課程を組んでいく、ということをこの年度末から４・５月に進めていきます。

小さなことからですが、このような取り組みから進め、縦のつながり、横のつながりも少しずつとれていければと思っています。

＜樋口委員＞

カリキュラムを作成し、就学がスムーズにスタートできるように各学校や、教育委員会とも連携・協力いただいていることがわかり安心しました。

＜議長：綾部市長＞

福祉保健部はどうでしょう。

＜福祉保健部長＞

認可園は、大きなところでは保育指針や認定こども園の教育保育要領という大きな目標はあると思いますが、ただ民間園なので、それぞれの園で保育目標があり、それを基に教育・保育が行われているというのが、綾部の民間園の状況であると思います。

先ほど、小学校へ連携しつないでいくという中で、それぞれブロック単位で連携されており、今後も教育部局と福祉部局が連携し、綾部の子どもがたくましく生きる力をはぐくんでいけることを目指していきたいと思います。

＜大島委員＞

複式学級について説明されましたが、その中で先生が、担任の先生以外にも全職員で複式学級に対応されていると聞きありがたく思います。

資料の中で、令和３年度から令和８年度の児童生徒数の見込みをみると、やはり徐々に減っていき、今後、物部・志賀以外にも複式学級が増えていくことが想定されますが、具体的にどれくらいの見込みでどの学校が推移していくのか教えていただきたい。

＜事務局＞

令和４年度については、物部・志賀・東綾の３校が複式、令和５年度は志賀、東綾の２校が複式、物部小学校は令和５年度以降、複式学級はいったん解消しますが、隣接の人数が１３人ぎりぎりの状態で推移しています。令和６年度は、志賀小・東綾に加え東八田小学校も複式学級となる見込みで、令和７年度、８年度も同様に３校の複式学級が継続する見込みです。

＜大島委員＞

少しずつ子どもが減っていくので、複式学級が増えていくということと、先ほどは志賀小学校の課題をあげていただきましたが、物部や東八田、東綾でもこれから同じような課題を抱えてこれからの教育にあたっていただくことになることがわかりました。

その中で、子どもたちの声が聞けてよかったです。保護者の立場で、複式学級になったことで、勉強がわかりづらくなったと、聞き取りにくくなったという話を聞くと心配になりますが、上級生が一緒になることで心強かったり、学べることがあったり、下級生を大事にする心が芽生えたり、先生が直接指導できない時間帯に自分たちが主体的に学ぶというところを実践できるよい面もあるということわかりました。

今後、複式学級が増えていく中で、説明会などで保護者や地域の方が不安に思われる際に、複式学級の先輩校として子どもたちの様子や反応を発信してもらえると、受け

入れる側も安心して、その時期を迎えられるのではないかと思います。ぜひ子どもたちの様子を継続してみて、発信していただきたい。

＜波多野委員＞

複式学級ですが、今年度は２年生と３年生の複式ですが、来年度以降の組み合わせの見通しを学校は立てておられるのでしょうか。

＜事務局＞

志賀小学校については、このまま２年生、３年生が卒業まで続きます。２・３年、３・４年、４・５年、５・６年となりますが、令和６年度になると２・３年生でも隣接で１１名となるので、どちらかの学年で複式になる予定です。どちらで複式にするかは未定ですが、１年生は対象外なので、２～６年の隣接で複式になる予定です。

＜波多野委員＞

子どもの立場でいうと、２年生は３年生を見て学ぶが、その関係がずっと６年まで続くと、下の学年の子はずっと後輩のままというマイナス面が出てくるのではないかと思います。令和６年度には２・３年生で複式になるのであれば、その学年で複式にしたらよいのではないかと思います。そうすることで、子どもたちは、先輩をみて過ごし、自分も先輩になるという入れ替わりができるため、教師の負担を減らすという視点からの、複式・学級運営ではなく、子どもの視点で見たときどうなのかということでの複式の運営をお願いしたいと思います。

＜事務局＞

貴重なご意見ありがとうございます。

＜議長：綾部市長＞

志賀郷は熱心に、定住・移住を促進している地域であるので、複式が解消できるよう取り組んでいかなければならないですが、もしそうなった場合は、波多野委員の意見も参考にしていただければと思います。

＜樋口委員＞

新たに東八田でも東綾でも、このままいけば複式学級になると聞きましたが、去年、志賀と物部が複式になるということで、議会でも話題となりました。児童生徒数の状況については、地域にもしっかりと情報を出し、地域でもＩターンＵターンなど定住を進めていただき、複式学級を何とかしてほしいと思っておられる保護者や地域の方がおられるのは、複式での教育のデメリットのイメージがあるので、物部・志賀でやっていただいていることで、子どもたちの学力などの面でも遜色なくやっているということを知っていただき、地域の方々に安心して複式学級を受け止めていただく、という取り組みもと大事であると思います。デメリットではなくメリットもあるということ、教育実践の積み上げたものを、地域や保護者に示し啓蒙していていけるよう、関係者のご協力を努力お願いします。

＜教育部長＞

貴重なご意見ありがとうございました。本日提供させていただいた児童生徒数の見込み数ですが、昨年の学校評議員会でお渡しし、地域の方も参加されていますので、

各学校の児童生徒の状況がどうなっていくかということを説明させていただきました。また、小学校については１３人になったら複式になるということを示し、市民新聞でも今後の推移も紹介されました。

複式学級に関しては、保護者や地域の関心が高く、地域や保護者の方が十分ご理解いただいた上で、そういった実態があり、今後このようになるということを認識していただく必要があると思っています。さらに実際、複式になる場合には、どのような教育体系で、どのような授業を進めていくのか、複式によってデメリット、メリットを十分ご説明し、ご理解いただいたうえで、複式になるということことが教育委員会としてことが大事なことと考えます。今後も適宜、情報提供をさせていただき、ご理解をいただきたいと思っています。

＜波多野委員＞

いじめの重大事案が１件発生したということは、綾部市で初めてのことではあると思いますが、その事に気づかれたあとは、学校と連携して適切に対応され、大事にいたってないと解釈していますが、今後の参考として、なぜこのような事態が起こってしまったのかというところを分析し、それぞれの学校でもいつ同じような事がおこるかわからないので、情報共有をしてもらい、学校で対応できるような指導をお願いしたいと思います。

＜事務局＞

委員がおっしゃるとおり、今後、今回の重大事態のケースを受けて、教訓化して、どのように取り組んでいくのかという事が重要であるかと思います。

基本的な部分ではありますが、教師のいじめのとらえや認識、情報共有のあり方、組織的な対応、児童生徒への指導、保護者との連携など、いじめの基本的な対応のステップをきちんと踏んで、適切な指導が行えるよう、今回の事案を教訓化して、全市的に研修体制を整えて、学校への発信もおこなっていきたいと思います。

＜議長：市長＞

これまでのご意見について、事務局から何かありますか。

＜事務局＞

貴重なご意見をありがとうございました。いただきましたそれぞれのご意見をこれからの事業に反映させていきたいと思います。

＜議長：市長＞

教育委員会は、教育長の交代等により１年間大変だったと思います。

長く組織にいたものとして、トップが変わるときは何かがおこりますが、その時にどのようにフォローするが、埋めていくか、うまく乗り切っていくかということが大事だと思います。この１年大変だったかと思いますが、教育委員会の皆様のご助言をいただきながら、年度末を迎えられてうれしく思います。

前足立教育長の時は、荒れる学校をどう落ち着いた学校にするかというところに心血を注がれていました。一定そちらは落ち着いてきましたが、複式学級の問題、いじめの問題、不登校などが新たな問題が増えてきていますので、新しい体制で解決して

いっていただきたいと思います。

また、社会教育の方もコロナで色々な事業やイベントがストップしていますが、一回休んでいるものを再開するのは倍のエネルギーが必要であると思います。コロナの終息をみながら、公民館活動やその他のイベントについて再開し、ひとつの見直すチャンスでありますが、社会教育の方も重要な年になると思います。

ポストコロナ時代をＧＩＧＡスクール、どこまでＩシティを入れることができるか、ポストコロナ時代の新たな教育をどうするか、ピンチをチャンスに、複式学級などデメリットを補えるひとつのツールになるので、発想を切り替えてやっていく必要があると考えます。

少子化がさらに進展していくので、複式学級の問題、もっと先には学校の再編などがでてくると思いますが、複式学級でもハンディキャップにならないというところを見せることが、地域の人の信頼関係につながっていくと思います。

少子化の問題については、地域の人にも当事者意識を持ってもらう、自分たちの地域の事なので、情報を共有したり、将来のシミレーションを見える化したりする中で、地域の子どもを主体として、当事者となって一緒に考える環境づくり、雰囲気づくりが必要かと思います。

また、現地現場主義が大事で、いじめ問題にしてもそうですが、事前の一策が事後の百策に勝る。あの時になぜそうしなかったのか、なぜ気づかなかったのかということが後の百倍にもなる。いじめの重大案件についても、初期動作に大きな課題があったと思うので、これをひとつの糧にして、子どもたちを主体として考える指導をしていただきたい。

この１年間の学びや教訓をいかし、令和４年度には、「第３次教育大綱」の改訂があるので、「あい夢未来教育構想」等に反映していただけることを期待しています。

これで、総合教育会議を終了したいと思います。

○　閉　　会

○　教育長挨拶